
蛇との遭遇

山口樹懶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇との遭遇

【コード】

N6554I

【作者名】

山口樹懶

【あらすじ】

2007年、ニューヨークのタンカー沈没事件で伝説の英雄を見て生き延びた、ただ一人の兵士。その記録。『メタルギアソリッド2』の二次創作作品です

(前書き)

この作品は『メタルギアソリッド2』の二次創作作品です。その設定や、ストーリーなどの著作権は全て『メタルギアソリッド2』の著作権者が所有します。また、作者はこの『蛇との遭遇』の著作権を放棄し、有しません。

ロシア人の私が今まで映像や写真でしか伝え聞いたことがなかったニューヨークに初めて赴いたのは五年前のことだった。

その理由というのがとてもたいそうなことで、アメリカ海兵隊のタンカーを占領する作戦の要員であったからだ。奇跡的にタンカーの沈没から助かり、今ではごく普通の市民に戻っているのだが。

タンカー占領と聞いても、いまいちパツとしないだろう。

でも、実際あの時は世間が大騒ぎしていた。

私たち、ゴルルコヴィツチ私兵が占領するはずだったタンカーにソリッド・スネーク　世界を何度も核の脅威から救った伝説の英雄が潜入し、その事実が報じられたのだから。

ここまでいえばわかっただろう。悪魔の兵器を胎はらに収めたタンカーに、私は降りたつたのだ。

今ではソリッド・スネークの姿を一瞬だけこの目で見たことが自慢となっている。

そのときは彼だとは知らなかったが、任務の後新聞を見てひどく興奮した記憶がある。

人に話してもあまり信じてもらえないが、とにかく伝えたい話である。だからここに書くことにする。

あれは　そう、激しい嵐の中だった。

嵐の中でさえ、自然にたたずむビル街はどこか神秘的でもあった。誰にも侵されない、不動の聖域のよう。

私は聖域から出づる方舟を侵します。

方舟に乗った巨人を救い、我らの祖国を世界にあまねく大国にしていただくのです。

ニューヨークにあり、ビル街とビル街の間に鎮座するハドソン川

を見下ろしながら私は頭の中で唱えた。

カサツカ・輸送ヘリに乗り合わせた五、六人の完全武装した兵士は、また兵士である私にも頑強さを感じさせ、畏怖させた。

誰一人として笑っている人がいなければ、悲しんでいる人もいない。彼らには感情を感じさせない。

迷彩服を着ていないときこそよく笑い、大声で陽気に話す同僚でさえ、作戦のときは沈黙を貫いている。

そう。私はゴルルコヴィッチの私兵。ロシア最強の兵士。

弱々しい政府兵とは違って、アメリカのたいていの部隊には負けない。

自分への慰めのようにもとれることを思いながら、小隊のヘリはタンカーを見つけた。

小隊の通信兵が持つ無線機から英語で

「始める」

という声が聞こえると、通信兵はロシア語で「降下準備だ」と言った。

誰か、と訊くと通信兵が答える。

「シヤラシヤーシカだ。あの人は英語も話す」「そろそろだ。ファストロープの準備をしろ」

彼はヘリの巻き上げ機を操作して縄をタンカーの許に降ろし、ヘルメットをかぶった。

「お互い、幸運を」

タンカーは真下に見えていた。二十メートルほど下で、レインコートを着た海兵隊員が懐中電灯片手に走り回って戸惑っていた。

私が暗視ゴーグルを装着すると、彼は降りた。私も決意して縄を掴み、一秒後には滑り始めていた。

加速すると全身で縄を抱く。かかと、内股、腕で縄を締めて減速し、タンカーの構造物の陰にある堅い甲板をブーツで叩いた。陰に入ったとたん、雨音が止んだ。さすがに雨は鉄を貫通しまい。

止まってはられない。背中に背負ったAKS 74U突撃銃を

取り出し、ボルトレバーを引いて薬室に弾丸を装填して構えた。その一瞬の間に進むべき方向を確認すると、そこに向かって走っていった。

再び雨音がする。銃の中でも特別頑丈なAKSは雨の中でも心強い。

ダイナミックかつ、静かにタンカーを攻略していく。

そして私は目の前に海兵隊員を見た。

私は暗殺者だ。敵を殺める。

念じながら、慎重に一步一步をかかとかから踏み込んで距離を縮めていく。

三メートルほどのところまで近づいていって、ナイフを腰のシースから取り出すと隊員は振り向いて私を見た。

武器の代わりに懐中電灯のみを持っていた彼の目は引きつっていた。

恐怖におびえる叫び声が声帯から出る前に殺してやる。アメリカ人。

”アーメン”。

ナイフを正確に、のどに向かって投げる。

まっすぐと、レーザービームのように刃は飛んでいって、のどに刺さった。

隊員は力を失い、目の前の甲板に心置きなく倒れていった。

倒れて魂を失ったひとつの体を見つめっていると、突然私の持つ小さな無線機から通信兵の声。

「占領したようだ。後続のやつらにここは任せて、俺たちは構造物に潜入するぞ……ん？」

「どうしたんだ？」私の心臓は少し活発になりつつあった。

ここには武装した兵士は俺たちしかいない。だから気配に気づく必要もないのに。

「ちよつと足音がしたんだ。別に気にすることでもないがな」

そう彼が言ったとたん、スイッチが入ったままの無線機から彼が

苦痛にうめいている様子が聞こえた。

「大丈夫か！」

無線機越しに私は叫んだ。

だが彼の声が聞こえることは二度となく、別の暗殺者のため息が聞こえた。

私は彼の持ち場へ走った。がむしゃらに、ただ奴を殺すという一心で。

そして、ハンマーでハンマーを殴ったような大きな物音に気づいてその方向を見ると……そこには見慣れない、SF映画にありそうな兵装を身に着けた暗殺者がいて、激しい嵐の中で頭に巻いたバンダナを揺らしていた。

彼は私に一瞥くれると、すぐさま逃げ始めた。

「誰だ！」私は思わず叫んでいた。

ただ、叫んで追いかけ始めたときにはもう遅く、彼は遠くの水密ドアを開けて艦内に飛び込んでいた。

侵入者を逃した、と思った。

だがこの男は誰にも見つからないだろう。プロだ。プロにはプロの役割がある。

そう感じて、私はタンカーの巡回に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6554i/>

蛇との遭遇

2010年10月11日01時40分発行